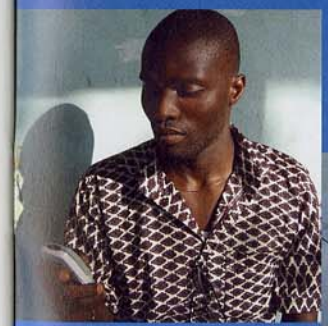
特集

ケータイ

二一世紀、世界中に浸透していくケータイ。日本では七割以上がもつという生活必需品になり、その形や機能はますます進化している。だが、世界中の人びとがあらたな技術をまったく同じように受容しているわけではないだろう。世界各地におけるケータイと人びととのつきあい方から、日本のケータイの特殊性や世界の文化について考えてみたい。

タイのミエン(ヤオ)族の女性



ケータイ文化人類学の可能性

藤本 憲一
(ふじもと けんいち)

武庫川女子大学助教授

「縁」と「好き嫌い」

これまで足掛け一七年にわたって、ポケベル・ケータイ研究に携わってきた(藤本『ポケベル少女革命』エトレ、富田・藤本他『ポケベル・ケータイ主義!』ジャストシステム)。以下、「縁」「好き嫌い」「居場所」の三つのトピックスを紹介しよう。

ケータイの「縁(ネットワーク)」では、旧来の血縁・地縁と、インターネットの電縁とが交わる。同性・同世代の結束を強める「娘宿/若衆宿」の復活を思わせるし、中東の水パイプや東アフリカのカートに似た「社交のための嗜好品」でもある。

「ケータイ好き(寛容)文化」と、「嫌い(非寛容)文化」がある。一九九〇年ごろの日本では、経済・地域格差以上に、世代・性差が大きかった。同じ若者でも、高校生と大学生、女と男とのあいだにギャップがあった。現在、当時の女子高生のリードによる「ポケベル少女革命」が普及させた文化に、四〇~五〇歳代の男女が同化しつつある。

国際的にリードしたのも、シンガポール・日本や北欧など、ユーラシア大陸両端の島・半島エリアだった。今では内陸部を初め、世界中で急速に、ケータイ文化の共有が進んでいる。たとえば、「大哥大」→「小姐小」→「手机」と変わった中国語の呼称は、中華社会がしだいにケータイ好きになった証明だ。「大哥=コワモテ兄貴」像はブルガリアでも報告されているし、「小姐=コギャル」イメージは日本とも呼応する。現在の素っ気ない「手机」は、道具として普及したせいだろう。

テリトリーの生成装置

「テリトリー・マシン(居場所機械)」としてのケータイについて。通常、ケータイは、つながり、交わる面が強調されるが、じつはパーソナルスペースを確保し、テリトリー(居場所・縄張り)を瞬時に生成する装置でもある。

ケータイで話し、メールを打つ。そのフリをするだけで、ケータイと人が融合した磁場を発し、結界(精神的テリトリー)が生じる。雑踏、電車、教室、会社といった閉塞・拘束状況でも、ケータイ一本で外界から隔絶できる。

たとえば、五〇〇年おきに地球を定点観測する宇宙人が、現代の生活を観察したら…。集団中の一地球人が、ケータイに着信したとたん雷に打たれたごとく、気分を高揚させる。同じく集団にいながら、一人液晶画面を見つめて忘我境に入る姿を見たら…。

たぶん、前者は「憑依」、後者は「脱魂」の現代版と解釈するのでは? かねてから筆者は、ケータイを用いた「集団への没入」を「ノリ」、「集団からの離脱」を「キレ」とよんで、「ハレ」「ケ」に代わる民俗語彙として提唱してきた。

こうした「テリトリー・マシン」という点で、ケータイは、チベット密教の仏具(ドルジ)と等価であり、枕元において悪夢を払うアメリカ先住民の「ドリームキャッチャー」とも等価である。自転車にまたがり、ケータイを覗く若者の姿は、歩きながら読書した二宮金次郎像同様、一種のテリトリー行動と見ることもできよう。

★詳細は"Personal, Portable, Pedestrian", Ito, M. et. alt., 2005 The MIT Press、カツ他編『絶え間なき交信の時代』NTT出版を参照。

コンビニの前でメールにふける若者

自転車上で、ケータイを覗く若者

機能的に等価なケータイとドルジ

日本ではケータイの普及とともにマナー広告も登場

中国の都市で見られるケータイの広告

特集 ケータイ

今ではケータイはビジネスの必須ツール

向こうに見える天幕は馬乳酒カフェ

モンゴルの「あんた誰？」

島村 一平
（しまむら いっぺい）
滋賀県立大学専任講師

携帯メールは「メッセージ」とよばれている

ウランバートルのケータイショップ

ここ数年、草原の国モンゴルでもケータイは都市部のみならず草原へも著しいスピードで浸透しつつある。モンゴルの人びとにとってケータイは今や日常生活には欠かせないツールとなっている。そんなモンゴルでケータイを使っていると、時折かかってくる相手の第一声に面食らう。「あんた誰？」自らは名乗らず相手の名を聞く失礼もさることながら、ケータイに相手の名前をたずねるとは妙な話だ。そもそもケータイは個人の「私物」であり、「わたし」以外の誰が電話に出るわけもない。ところが、モンゴルでは「あんた誰？」は、固定電話の時代からの伝統的（？）な電話のかけ方なのである。

じつはこれには理由がある。なんとモンゴルの人びとはケータイを貸し借りするのだ。だから、かける方も相手の名前を聞かざるをえないのである。もっとも貸し借りの相手はごくごく親しい家族や親友に限られる。ケータイを貸し借りする理由として、第一にケータイも通話料金も非常に高いことが挙げられる。労働者の平均月収が七〇〇〇～八〇〇〇円ほどのこの国で、ケータイはなんと月収ほどの値段がする。また、ケータイの通話料は最近まで一分あたり約一五円であった。最近大幅な値下げがおこなわれ、一分約三・五円となったが、それでも平均収入を考えると非常に高いことに変わりはない。第二に口座引き落としの支払いシステムが確立していないことと関係がある。ケータイの通話料はプリペイドカードによって支払われる。購入したカードに記載された番号を電話機に打ち込むことで一定時間の通話する権利を獲得し、通話が可能になるのである。だから他者に電話機を貸しても自分の口座から通話料が引き落とされる心配はない。

というわけで、彼らは通話時間を消費し、新しい通話権を買うお金がないときには、家族や友人からひょいとケータイを借りて使い回すのである。したがって、モンゴルでは携帯番号を教えてもらっても、その人が出るとは限らない。「あんた誰？」気づいたころには、わたしもそうやってケータイをかけるようになっていた。

そもそもモンゴル遊牧民たちのあいだでは、家庭内でモノを個人で所有するという感覚はあまりない。たとえば、衣服も親子兄弟問わず自由に交換して着る。歯ブラシや下着といったごく私的なモノを除けば、天幕のなかにある道具やモノに個人所有の「私物」はほとんどなかったといってよい。この習慣は、遊牧民のもともとの文化なのか、私有財産を否定した社会主義イデオロギーの産物なのかは不明である。だが、少なくともケータイが「私物」ではないのは確かであろう。

そんなモンゴルでも最近、画期的なケータイのサービスが始まった。なんと自分の買った通話権を携帯メールで他者のケータイへ転送、プレゼントできるというサービスだ。ケータイにかけて「あんた誰？」といわなくてもいい日はそこまできているのかもしれない。

トン族で大流行

兼重 努
（かねしげ つとむ）
滋賀医科大学助教授

村にはバイクタクシー運輸業を営む若者もいる。彼らにもケータイは必需品

二〇〇五年八月九日、中国広西（クワンシー）のとある山村で、わたしが世話になっている家の四男が二〇数キロメートル離れた町から戻ってきた。手には買い換えたばかりのケータイ。国産品で値段は一三〇〇元（約二万円）。当地の平均月収をはるかに超える。メールのほか、写真、動画撮影もできる多機能ケータイである。彼のお気に入りは写真機能だ。さっそく二歳になる愛娘を撮影した。次男も最近一二〇〇元のケータイに買い換えたばかりだ。次男と四男は、おたがいのケータイの機能を比べ合っていた。

トン族という少数民族が住んでいるこの村をわたしが初めて訪れたのは一九九〇年だった。約五〇〇戸のこの村で当時電話を引いている家は皆無で、日本と村のあいだの連絡手段は手紙だけだった。一九九〇年代中ごろになって村でいちばんの金持ちが家にプッシュホン電話を引いた。この電話は私設公衆電話として活躍した。近年の中国のめざましい経済発展を受けて、村の若者は沿海部などに出稼ぎに行き、いくばくかの現金を手にするようになった。また電話開設料金の引き下げが始まり、普通の家庭でも無理をすれば手が届く価格になった。村で家庭用電話（すべてプッシュホン）の普及が始まったのは二〇〇〇年ごろだ。間髪いれずに、二〇〇三年前後からケータイが若者のあいだで爆発的に普及し始めた。

日本と同様、ケータイの機能は日進月歩である。高くても無理して新鋭機を買う若者もいる。この村ではケータイのゲームで遊ぶ姿は目にするものの、メールやインターネットに興じる姿はまず見かけない。一方、二〇〇～三〇〇元の中古機で我慢する若者も少なくない。中古ケータイの売買もきわめてさかんだ。だが、当地の小中高生にとってケータイはまだまだ縁遠い。親は学費を工面するだけで精一杯だし、山村ではバイト先もないからだ。

野外公衆電話など皆無の山村ではケータイはほんとうに便利だ。羅漢果（ラカンカ）栽培のため、電気もない山の出作り小屋で寝泊りすることが多い四男夫婦。二人とすぐに連絡がとれるのもケータイのおかげだ。

ベトナムの連絡道具

樫永 真佐夫
（かしなが まさお）
本館民族社会研究部

ケータイ関連の店がほぼ数百メートルごとにあり、多くの人がプリペイドカード式を使用している

部屋の電話が鳴ったので、受話器をとって「アロー（もしもし）！」と発声するや、「マサオさんですよね」とだけ断って、相手はすぐに用件を伝え始める。こちらは心の準備がまだできていないから、話を遮ってどちらさんか聞いてみる。すると、「ハーです」と一言。しかし、ハーなんて名前の女性はたくさんいるし、声だけですぐにどのハーさんかわからない。「どちらのハーさんでしたっけ？」とも失礼な気がして聞きにくいので、「今、どこからかけていますか？」など、ヒントをくれそうな質問を投げてみる。

ハノイで一般家庭にようやく固定電話が普及し始めたばかりの一九九〇年代後半、電話を受ける際には、まだこんな緊張が伴っていた。たとえば「もしもし、どこそこのハーですが、マサオさんいらっしゃいますか？」のような、固定電話での定式化された導入挨拶は、ほとんど外国人用のベトナム語教科書のなかにしかなかったのである。

二〇〇〇年以降、固定電話の普及はケータイの急速な普及に追い抜かれた。ケータイだと、かけた側の番号が通知されるので、もはやいちいち相手を確認し合う必要がない。固定電話における定型的なやりとりが広く共有される以前に、連絡したい相手に最初から直接つながるような電話コミュニケーションの時代にハノイは突入したのである。

ケータイはどこでも鳴るし、受けた電話ならどこでもしゃべる。バイクや車を運転しながらケータイをかける姿もめずらしくない。しかし、ケータイで長電話する人は少ない。電話代が高いからである。待ち合わせを決めたり、急用以外は、たいがいメッセージを打つだけで済ませている。とはいっても、バスを待っている人や道端で所在なさげにしている人が、ケータイをいじる訳でもない。ケータイは主として他人と直接会うための連絡道具として用いられているからであろう。

ケニアのケータイ活用術

石田 慎一郎
（いしだ しんいちろう）

本館外来研究員

とる前に切れる。とった直後に切れる。ケータイのワン切りは、ケニアではよくあることだ。その多くはいたずら電話や間違い電話ではないので、受け手側は、かけ直して確かめる必要を感じる。親戚や友人からの電話という可能性が十分にあるし、寄宿学校にいる息子や娘が誰かのケータイを借りてかけてくることもある。誰であれ、ワン切りするのは、どうしても通話料金を節約しなければならない切実な事情を抱えているためである。

わたしが調査をしているケニア中央高地のニャンベネ地方では、通信圏の拡大とともに、二〇〇三年ごろからプリペイド式ケータイの利用者が急増した。ミラーという嗜好品作物の産地ならではの事情がその背景にある。ミラーは、摘みとった瑞枝（みずえ）を噛んで楽しむ嗜好品であり、鮮度が命である。地元の人びとがナイロビなど大都市の顧客を相手に取り引きするうえで、迅速かつ確実な連絡手段となるケータイが何より便利なツールなのである。

だが、最近、利用者の幅がさらに広がっている。ノキアやサムソンといった海外メーカーの最新モデルが地方都市でも販売されるようになり、流行に敏感な青壮年の心をとらえつつある。本体を買うだけでも公務員の給料一ヵ月分相当の出費になる。だが、周囲の人びとが使い始めると、多少無理をしてでももちたいという気持ちがますます強くなっていく。

地元でケータイをもっている人に電話番号を聞くとふたつ教えてくれることがある。その多くは、固定電話との併用ではなく、ケータイひとつでふたつの通信会社から番号を取得し、併用している人びとだ。サファリコム社とセルテル社のシムカード（電話番号・利用者情報が書き込まれたICチップ）を両方とも購入したうえで、同じ会社どうしの方が割安だからと電話相手に応じて入れ替えるのである。

とはいえ、ケータイは、コミュニケーションの用途以外でも、人びとを惹きつける魅力をもっているようだ。地元では、ケータイの形をした電卓さえ出回っているのである。

兄弟そろっての姻戚訪問の日、手持ち無沙汰でケータイをいじる

バングラデシュのケータイ婚

南出 和余
（みなみで かずよ）

総合研究大学院大学
文化科学研究科

記念すべき結婚式で、花嫁がケータイで花婿と話す

バングラデシュの農村では近年、ケータイと出稼ぎに行く男性が急激に増えている。ケータイは、海外で働く息子や夫の無事を知り、仕送りの催促をするための大切なツールだ。逆に、その高価な購入費や電話代は、出稼ぎ者の仕送りに頼る。こうしてケータイは、農村と海外を結んでいる。

現地でお世話になっている家には、七人兄弟がいる。一番上の兄はギリシャで働き、ここ数年、週に一度はケータイに電話をかけてきては、家族の近況を知る。母は息子の健康を気に留めながらも、六人の弟妹たちの教育や結婚の資金、家計のための仕送りを「皆あなたのために祈っているから」と言って命ずる。おかげでその家は、周りのどこよりも立派で大きくなった。

しかし母にはひとつ心配事があった。長男の結婚である。長らく海外にいるため、三〇歳を過ぎても結婚できないでいた。バングラデシュの農村では、大半の場合、男女とも親が決めた相手と結婚する。結婚式当日まで相手の顔を見ない場合もある。息子や娘の結婚を取り計らうのは親の務めだ。母は、親戚や近所の人びとに頼んで、長男の花嫁探しを始めた。兄も、母の選んだ相手ならば文句はないと言う。容姿、家の釣り合い、学歴などから、隣町に住む一人の女性との縁談が整った。彼女の家族にも、ドバイ（アラブ首長国連邦）への出稼ぎ者がいる。すぐに日取りも決まり、ギリシャの兄に知らされた。

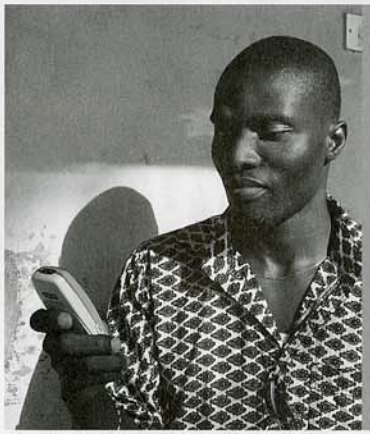
花嫁の家ではすっかり準備も整い、祝いが始まる。ところが、もう一人の主役の花婿である兄が、仕事の都合で帰国できなくなった。当然結婚式は延期されるものと思いきや、予定どおりおこなわれた。主役なしの結婚式。そこで一役買ったのがケータイである。二人の初顔合わせとなる場面で、ケータイが鳴る。花嫁がケータイで花婿と言葉を交わし、結婚は成立した。後から聞いた話によれば、兄は電話で「心配しなくてもいい。うちの家族は皆いい人たちだから。帰るまで、自分の家だと思って暮らしていなさい」と伝えたらしい。その後兄は一時帰国し、三ヵ月の新婚生活を送った。兄が休暇を終え、妻を残してギリシャに戻った後は、ケータイで新婚生活。日々続く夫婦の長電話に、母は電話代で仕送りを食い尽くすのではないかとひそかに心配した。約二年後、兄は妻をギリシャに呼び寄せた。

「ケータイ婚」「ケータイ夫婦生活」は、出稼ぎ者の増加とケータイの普及により、今ではさほどめずらしいことではない。バングラデシュの電話会社も、そろそろLove割引を考えた方が良さそうだ。

ろう者とメール —カメルーン—

亀井 伸孝
（かめい のぶたか）

関西学院大学助教授



アフリカ都市部のろう者たちのあいだで広まる携帯メール。2006年、ガーナにて

わたしはアフリカの諸都市で、ろう者のコミュニティの歴史と文化の調査をしている。耳が聞こえないろう者たちの社会関係の基本は、直接会って彼らの言語である手話で話すことだ。わたしがカメルーンで調査を始めた一九九〇年代中ごろは、ろう者たちはおたがいの家を訪れて話し、相手が留守のときはメモを扉の下に残すというような方法で連絡を取り合っていた。

調査を始めた当初、わたしはろう者E君の家に居候（いそうろう）させてもらっていた。E君は暇さえあればおしゃべりにつきあってくれ、その町の様子、アフリカのろう者の歴史、国連とイラク制裁の問題など、あらゆる話題をわかりやすく手話で語ってくれた。このおしゃべりのおかげでわたしは「手話漬け」の日々を送り、その暮らしのなかでカメルーンの手話を体得した。

ところが二〇〇五年に再訪すると、E君はケータイを手に入れていた。文字のメッセージで遠方のろう者と直接やりとりができる。E君はすっかり「メール魔」になっていた。居候するわたしをほったらかしにし、のべつ下を向いてフランス語でぽちぽちとメールを打つ人になっていた。やれやれ、彼が暇な時代に手話を仕込んでもらってよかった、と思ったものだ。

すべてのろう者がケータイを買えるほど裕福ではないが、資源が限られたアフリカの知恵とは「共有」である。家族や仲間のケータイを借りて、相手に近そうな知人あてに「誰々に『…』と伝言よろしく」と送れば、話が伝わっている。また、「公衆携帯屋」も便利だ。道ばたにテーブルひとつ出した小さい店があり、ケータイを借りることができる。ろう者はそういうところに立ち寄ってケータイを借り、一通いくらという料金を払ってメールを出すのである。

ケータイは、視覚世界を生きるアフリカろう者たちの生活と社会関係を確実に変えつつある。それがろう者のエンパワメントや社会活動のさらなる活性化に向かえばよいが、と願う研究者のわたしをよそに、E君は今日も「Bonjour!（こんにちは！）」と仲間にメッセージを打っているのだろう。

特集 ケータイ